

祭 文 —— 石田組合長

菊薫る好天の下、大八洲開拓物故者の御霊を祀る碑前において満洲開拓殉難者五十回忌並びに物故者合同慰霊祭を挙行するにあたり、遺族および組合員一同に代わり謹んで祭主のことばを申し上げます。

昭和二十年八月、ソ連の参戦により大陸開拓の夢も空しく営々として築いてきたすべてに未練の涙を残し、第二の故郷を後にした満洲開拓者が悲劇の道を歩むことになった恐ろしい大戦が終結して五十年が経ちました。

顧みるに、皆さんと寢食活動、喜怒哀感とともに決意と抱負を満身に抱いて新しい出発をした開拓生活、突然襲った戦禍にも飲まず食わずの野宿、暴徒の迫害、ソ連軍の襲撃に裸足で逃げ歩いた修羅場の逃避行、九死に一生を得て悲壮な思いでやっと辿り着いた収容所で打ち続く酷しい寒さと飢えに苦しみぬいた越冬生活、そうした満洲開拓の波乱激動の陰には敗戦により無念の涙をのんで最期を遂げられた開拓関係者八万余柱ともいわれる極めて痛恨に堪えない現実がありました。

そのような中で、大八洲開拓団をはじめ我が組合関係の生きて再び故国に帰還できなかった皆さんは、あわせて百六十五霊余にのぼっています。そして、可憐な命を飢えと病に奪

われた半数にのぼる乳幼児と少年達をはじめ、希望に満ちた開拓の前途半ばに皆さんが流した血の泪と無限の傷は永劫に乾くことも癒えることも決してできないことは誠に遺憾に堪えません。幸にして生きて帰った私達は、皆さんが生前に果せなかった開拓を再び故国で志してより五十年、幾多の困難を克服できたことは偏に皆さんの泉下の霊のお導きと御加護の賜と深く感謝するとともに、明年秋に迎える入植五十周年を生きて皆さんと喜びを共にできないことを私どもはこの上なく寂しく惜念の情禁ずるを得ません。

帰国以来片時の間も忘れることのなかった佐藤組合長は、異国に埋もれた皆さんを心から悼み、遺族や同志の者と慰霊の儀を生涯続けて参りました。

さらに、佐藤組合長が生前の念願であった現地墓参を二回にわたり生き永らえた有志一同で果し、ようやく念願を達成できましたことは、亡き皆さんへのせめての追悼供養と思っております。

半世紀の歳月は、あの忌まわしい戦争と満洲開拓の悲劇も次第に忘却の彼方に押流されんとしている時代の無情を嘆くとともに、そうあってはならないことを何時までも心から願って止みません。そして、非業の最期を遂げられた皆さんの追憶と愛惜の念は私達には終生忘れることはできません。

このたび、節目の五十回忌法要を契機に、皆さんが満洲で

果せなかつた開拓の夢と希望をかなえるためにも大八洲開拓五十年の礎をさらに強固にして、開拓百年を目指して組合経営の維持発展に努め、この先、何時巡り来るかもしれない難局に混迷した時、私どもの唯一の心の支えと励ましとなる留魂碑に眠り給う御遺霊を幾久しく護持奉る決意の程を御霊前にお誓い申し上げますので、何卒遺族並びに大八洲開拓の前途に進路の過ちなきようお導きを賜りたく願ひ奉りますと

十六 大八洲神社の由来と再建（平成八年）

1 神社の起源

昭和十四年旧満州の北辺に大八洲開拓団が入植し、新しい村造りに鋭意開拓を進めていたその開拓村の鎮守として神社建立を団員が願ったので、昭和十六年に宮大工の今井丑太郎老棟梁が社の造営にかかった。鳥居の用材伐採から建立一切の作業を団員の共同奉仕をもって昭和十八年南山の丘に大八洲神社を建立し、伊勢の皇大神宮と山形県の月山神社の御神符を合祀奉り、在満教務部の神官養成を受け資格を得た団員である後藤武が神職を務め、十月一日に鎮座除幕式を行い、入植五周年祭とともに神社のお祭りを催した。

祭日には開拓者と地域の鮮満住民も共に相集いその秋の豊

もに、永遠の安らかなるお眠りと御冥福をひたすら御祈念申し上げます。本日の追悼法会並びにお別れのことばといたします。

平成七年十一月一日

大八洲開拓農業協同組合長

祭主 石田 時雄

穰を感謝し、神社は開拓の守り神として団員家族の心の拠り所であるとともに、その時代国が開拓の理想とした五族協和の掛け橋の一端としての役割を担い村の中心的存在をなした。

ところが、祭礼後三年足らずで敗戦のため開拓地引揚げの事態が突発した。昭和二十年八月団に残っていた老人婦女子は慌てふためく中にも神様だけはと思ひ、年長の田中喜太郎が奉持して神社をあとに十四日開拓団を出発した。

しかし、避難の途中八月三十日不意に数百名の暴徒に襲われ、田中本人も頭や足に槍鎌で負傷した際、恐怖と混乱に紛れ肌身離さずきた神様も僅かな所持品と一緒に行方不明のお粗末な結果となり、田中老も長春まで辿り着いたが、疲労衰弱の末悲しい最期に果てて終った。